



Title	<書評>Gillian Naylor, The Arts and Crafts Movement; A Study of its Sources, Ideals, its Influence on Design Theory, 1971, London, etc., 1980, Cambridge, Massachusetts.
Author(s)	羽生, 正氣
Citation	デザイン理論. 1981, 20, p. 129-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Gillian Naylor, *The Arts and Crafts Movement;
A Study of its Sources, Ideals, its
Influence on Design Theory,*

1971, London, etc., 1980, Cambridge, Massachusetts.

本書が第一に注目される点は、従来かなり莫とていたアーツ・アンド・クラフツ運動の概念に対して、その概要を包括的に論述し、初めて単行本として提示した点である。

これまで主にN. ペヴスナーの「モダン・デザインの展開」によって知られてきたこの運動の概念は、機械時代の黎明期の混乱に対して、生活諸条件の形成における態度の反省を提起しつつも、手工工作という時代錯誤的な手段・方法によって対応した、「失敗した近代運動」と考えられてきた。この点は、S. ギーディオンの「時間・空間・建築」でも同様であり、例えばこの運動の影響がアメリカにも及んだとしながらも、そこではしかし、手工工作の強調にはわずらわされなかったと、より冷淡ですらある。比較的近来の出版であるR. バンハムの「第一機械時代の理論とデザイン」(1960年、ニューヨーク)では、もはやこの運動は近代運動の構成要素ですらなくなり、むしろ、例えば未来派の興隆などの場合、ラスキンや手工工作思想からどれ程飛躍的に超脱し得るかが評価的に論じられている程である。後二者にくらべるとペヴスナーには、はるかに深いこの運動への理解と共感が窺われ、その後の著述「美術・建築・デザインの研究」でもそれは顕著である。

けれども、これら三者は共感の度は異なるにしても、いわゆる勝者としてのモダン・デザインの角度からこの運動を取り上げている点で明瞭に一致している。したがって、何故機械文明の興隆期にあえて手工工作をもって向かわねばならなかったか、といった共感に基づく問いの発し方に欠けていた。したがって、あらかじめ評価を前提されたこの運動の細部にまで至る生きたプロセスの記述はほとんど省略され、運動内部の左右、前後の関係も社会に対する関係も、あまりに大ざっぱに扱われてきた。

本書は、こうした共感に基づく究明の態度を貫ぬくことによって、このような先達たちが残した問題点を解明しようとしている点で評価し得る。また共感的の研究といっても、よ

くありがちな対象への過度ののめり込みはなく、特に通史との関係に終始クールな関心を向けているのは、当然のことだが好ましい。

著者ネイラーは、オクスフォードに学んだ後に、デザイン雑誌の編集に携わり、日本ではその好著「バウハウス」(Bauhaus, London, 1968, 利光 功昭, 昭和50年, パルコ出版)によって知られている。最近、Studio 誌などへの寄稿もみられ、また、オクスフォード辞典等にも執筆し、この運動に関する一人者と目される女流デザイン史家である。現在はキングストン工科大学で芸術・デザイン史を講じており、2年前筆者の滞英中はブライトン工科大に在籍しており、論述からみても女流であると同時にアカデミックな論弁の気質を備えた珍しい研究者のようだ。

すでに触れた本書の全体的特徴は、その序文において色濃く現われている。

モリス研究者レイ・ワトキンソンの指摘と同様、著者はこの運動を個の集合体と捉える。なる程最終的には展示協会としての組織やルーズながら趣意書や綱領をもった運動体であったが、その内容を構成する各項は、強く個人の、社会に対する倫理的意識に動機づけられていたことを重視する。この結果、デザイナー達の思考は、単にデザインの最終製品の美や質に限定されず、生産システムや社会思想と有機的に連らなつた個と社会の哲学に広がる。このことは、著書が引用しているアシュビーの言葉、「アーツ・アンド・クラフツ運動は、仕事や生活の諸標準を問題にする」に端的に現われている。彼らにとってデザインとは各自の生き様や各自の社会意識と分ち難く融合した使命的課題であった。

ネイラーはこの「非遵守的な粗野なばかりの個人主義」が、それぞれの哲学に基づきつつ、個々に慣習的手法を批判して各自の方法を開拓し、各々の標準に従って多様な活動を展開したとする。そしてここから生じた共通の方法としての手工作の意義に理解と評価を与えつつも、この個人主義に、19世紀的基調・非現実性の限界を認める。しかし、著者は彼らの19世紀的理想的人間主義の中に「デザインを社会的文脈において探究する」課題は次々と受つがれ、方法は異にしつつもグロピウスによって解決されたとする。ただ、より広い近代運動の流れの中では、彼らの理想は、過度の、あるいは誤まった現実主義の前にしばしば誤解されてきた。さらに、彼らにとって決定的に重要な設問であった「われわれは機械技術を完全にコントロール出来るか」を、著者は、すでに機械を一応征服したかにみえながらもなお環境汚染等のより根本問題に病む現代に対しても有効であると考えている。こうした著者の通史観は、近代デザイン史のひとつの見解、正統だがこれまで見忘れられていたそれとして意義深い。また、彼らの問題意識は今日もなお有効であり、否、今日でこそ新たな意義をもつと示唆している点で興味深い。

第1章「諸源泉」では、この運動の起源に触れてコブデン＝サンダーソンの唱える1888年説よりもクレインの説く1860年代以降説をとろうとしている。しかし前史はさらにさかのぼり、かつ複雑だとして、18世紀の産業革命の進展と社会の価値観の変動、カーライルの文明批評、ピュージンの、産業者や政治家の上からの改良運動、コールとサウスケンジントン派の改革などから構成している。いずれも簡明で首肯し得る。モリスにピュージンの影響を認めるなど興味深い指摘がみられる他、とくにコール派に対し、ラスキン派との差異を、倫理的・基礎的反省というよりも楽観的な実用主義に終始したとし、一面で評価しつつも従来の諸説に見られなかった強い批判的論述を提起しており、注目される。

第2章、第3章はそれぞれ、ラスキン、モリスを扱い、「新しい道」の「預言者」、「実践への理論」として位置づけている。ラスキンはエマーソンらアメリカの思想家たちとの興味深い比較から始められ、自然に対する共通の敬意に立ちながら、産業や機械を評価した新世界の理想主義者たちと異なり、それらを人間の基礎的価値を破壊する元凶とするに至った英国の状況とラスキンの思想を解き明かす。そしてラスキンが「芸術は社会、とくにそこでの人間の労働と切離し得ない」との信念から、批評の対象を、絵画から建築・デザインさらには社会へと必然的に拡張していった展開が要領よくまとめられている。モリスについては、その多彩な経歴や活動を、ラスキン思想の実践的主体化の過程ととらえ、とくに1870年代後半以降の社会的関与においてその結実を見る点で筆者は評価したい。しかし、これら両章とも対象があまりにも大者であり、限られた紙数の中にいささか無理に押し込められた感はまだぬかれない。

第4章、「ギルドとギルド人」では、1880年代に続々結成された団体のうち、「センチユリー・ギルド」「芸術労働者ギルド」「アーツ・アンド・クラフツ展示協会」の概要を叙述し、それぞれに重要な役割を果たしたデザイナーたち、マクマード、デイ、クレインを論じ、またこれらの動向に絡む日本美術やアール・ヌーヴォーにも触れている。マクマードを70年代と90年代を橋掛たデザイナーとする等、各個性と役割がよく描き分けられ、また団体相互の関連も、うまく解明されている。また冒頭に、モリスの死（1896年）の頃のデザイン状況、特にアーツ・アンド・クラフツ運動の隆盛と先導性、その圧倒的な、アメリカに迄及んだ影響をまとめて記述し、それ自体興味深いのが、構成上や、無理が感じられる。さらに、「芸術労働者ギルド」を中心としたこの運動の教育面への大きな影響力について触れ、コールらが再興した「デザイン学校」の「絶対原理」の前提とその機械主義的抽象的教授といった技術主義的教育方針を抜本的に改革し、クレインやレサビーが、具体的なもの、形態・道具・手法・素材と関連した教授によって、個的感情の喚起と自己表現の促進をはかる、工芸的教育方針を打建てたとする。きわめて興味深く、未だ解明され

てはないが、後のドイツへのこの面でのさらなる影響関係が予測されよう。

第5章、「ギルドと産業」では、デザインと産業との関係が改めて問われる。アダムやウェジウッドら18世紀に達成されていた両者の協調関係は、19世紀に入って産業革命が破壊的影響を増すにつれ、そしてラスキンらが産業と敵対するにつれ、大勢として両者は乖離していった。しかし、1870年代以降は「芸術は国際市場における目玉」となり、モリスをはじめこの運動の多くの担い手たちが、セミクラフト産業と活発に連合したとして、陶磁器、家具、ガラス器と繊維、銀器と金工の各領域について述べる。同時にそれらに携わり活躍したデザイナーたち、マーチン兄弟、ド・モーガン、ドレッサー、ジムソン、パンスリイ兄弟、パウエル社、ジェフリイ商会、ベンソン、ディクソン、ガスキンらに触れている。また、章末に「国立芸術＝産業協同促進協会」について述べ、この運動との関連や近代運動への道へ連らなると考えられたセディングの思想を挙げているが創見と思われる。しかし、1900年から第一次大戦に至る英国の不況などが、両者の蜜月を打ちくだいたとする。

第6章は、「アシュビーと機械の技術」と題し、もっとも野心的で原理的な実践を果したアシュビーと「手工作ギルドおよび学校」につき、アシュビーの未公開手稿を素材として物語り、ひときわ生彩を放っている。ロンドンの貧民街での社会奉仕活動から始まったこのグループは、アシュビーの能才もあって19世紀末には名声を博すが、さらなる理想の全面的実現を追い、グロセスター県の寒村チップینگキャムデンで共同村を建設するため、1902年150人からなる工人とその家族が自転車で大移動する。そこでの共同制作や共同生活、ユニークで中広い教室活動（オクスフォード大学教員の教養講話から農耕・料理・様々な生活技術・体操・水泳などに至る）が興味深く描かれている。しかし不況のために1907年解体を余儀なくされる。アシュビーは、「既存の技術は不要であり、否積極的に有害である」と述べた程、徹底的なアーツ・アンド・クラフツ思想によっており、1911年頃から機械肯定に改宗する。この改宗の前後アシュビーはライトと対話と親交をもち、両者の相互影響、とくに前者の改宗に関係がある可能性が示唆されている。

第7章「効率的様式に向けて」は、20世紀の最初の20年間の英国デザインの動向を扱い、不況と英国人のもの造りの頑固な態度とが災いして低迷する様子を、前半はレサビーの思想と活動、後半はドイツにおける展開を中心に論じている。レサビーは、モリス以後の最大の指導者であり、ムテジウスが最高の芸術学校と折紙をつけたセントラル・スクールを創設・指導したデザイン教育家であった。絵画を、それ自体を目的としてではなく、クラフツマンシップの訓練手段として採用したとか、工房的教育の徹底や実践のみの教員組織とか、当時としては画期的な体制が採られた。いくつかの部門のうちとくに製本印刷工房

はジョンストンをはじめこの運動のエッセンスが結集した。レサビーは、時に「誤解され易い、単純な人間主義」を基礎とし、しばしばそこから機能主義理念への類似や、工学的デザイン教育への展望が生まれたが、ドイツやコルビュジェにおける飛躍を欠いてそこまでにとどまるとされる。1931年にレサビーが死に、その墓碑に「愛と労働こそ、すべて」を記されたことは、この運動の精神を象徴している。

第8章「強化か、消滅か」は、スカンジナビアの状況を紹介し、社会の状況によっては、英国の理想が現実的にも成功を得るとの観点から、現代においても、否今こそ、この理想的人間主義を、再検討すべきではないかと示唆している。

巻末には、文献、出典と注、索引が完備され、よく選択された101点のイラストレーションは、終始一貫した論述とあいまって、この書物をきわめて優秀な研究的概説書としており、また矛盾しているようだが、巾広い層に対する読み物としても面白いのではなからうか。

全体的にみて以上の印象をもっているが、ドレッサーの関わり、ヴォイジー像などが手薄であり、惜しまれる。滞英時、レイ・ワトキンソン氏に何故、包括的なアーツ・アンド・クラフツ運動のよい単行本が少ないか質問したところ「とても一冊の本におさまり切るとは考えられない内容をもつ運動である」との答えであった。従って上記の点も、多分そのためであろう。

とは言え、最近是这样した動向に関心が向けられているせいか、関連書も相当出てきているので、最後にそれらに触れておきたい。

Lionel Lambourne, *Utopian Craftsmen; The Arts and Crafts movement from the Cotswolds to Chicago*, (London, 1980) は、発行年が10年あとであり、テーマごとの構成やイラストレーションの選択などに配慮があり、ネイラー書の恰好の補促といえるだろう。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のスタッフである著者が、ネイラー書刊行の後とりまとめた同展覧会の仕事で下敷になっており、この点でもそう言えそうである。

Peter Davey, *Architecture of the arts and crafts movement*, (London, New York, 1980) は、表題の示す通り、この運動の建築活動にスポットをあてた書物だが、運動自体が広義では理想的環境形成を中軸としていたため運動全体と重層した論述が期待される。白黒のみだが、237点にのぼる挿図も興味深い。

この他は、以下に列記するとどめる。後2者は展覧会カタログである。

James D. Kornwolf, M. H. Baillie Scott and the Arts and crafts movement,

(Baltimore and London, 1972)

Robert Judson Clark, ed., *The Arts and Crafts Movement in America 1876—1916*, (Princeton, 1972)

The Fine Arts Society Ltd., *The Arts & Crafts movement, Artists Crafts men & Designers 1890—1930*, (London, 1973)

京都工芸繊維大学 羽生正氣

追記. 校正の時点で, 興味深い書物を入手したので追加したい。

Anthea Callen, *Women Artists of the Arts and Crafts Movement 1870—1914*, New York.